
雨宿り

好-kiss-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨宿り

【Nコード】

N6162T

【作者名】

好 - k i s s -

【あらすじ】

父さんと喧嘩した。いつもすれ違ってばかり、お互いのことをよく知りもしない二人。親子の絆というものが、僕らにはあるんだらうか……

一人の少年、その人生を左右したであろう一日を、ここに

(前書き)

初めての投稿です。よろしくお願ひします。

話を書くのは好きですが、面白みに欠けるとよく言われます。

「THE 雰囲気」の私ですが、生温かい目で見守ってもらえると
ありがたいです。

それではどうぞ。

田舎のバス停の時刻表は、真っ白だ。数えるほどしかないバスは、時刻表に染みをつくるだけ。

昔から計画性のない僕は、しとくと降り続ける雨を鬱陶しく思いながら、暗く沈んだ空を見て途方に暮れていた。

父さんと喧嘩した。

高校を卒業した後は就職するつもりでいたが、父さんに反対された。家は代々農家で、姉が一人と弟が一人。長男である僕は、父さんに家を継ぐよう言われていた。頑固な性格と古い考え方の持ち主である父さんは、どうしても長男に継がせたいらしい。

だが、現実として僕に継ぐ気はない。それに、弟が継ぎたいと申し出ている。継ぐ気のある人間にこそ継がせるべきだと思うが、父さんは首を縦に振らなかった。

その事ではよっちゅう父さんと衝突した。母さんは、その事に関しては口出しをしない。自分の進む道ぐらい、自分で決める……って。父さんとの喧嘩の度に騒いで荒らし放題なのに、それでも黙って見ているだけなのか。

そうした緊張状態が続く日々、うんざりするほど口論になった。

そして高校三年の春、日に日にエスカレートしていく父さんの暴力に、とうとう僕も耐えられなくなった。

「ぶざけるなっ！！ お前は俺の言う事だけ聞いてればいいんだっ！」

そんな叫び声と共に、道路に転がる人影　僕がいた。僕が自室で勉強をしていると居酒屋で飲んだ帰りなのか、父さんが酔った勢いで絡んできた。廊下を引きずり外に出し、夜遅くであるにも関わらず怒鳴り声をあげた。

「ぶざけてんのはそっちだろっ。お前の言う事なんて誰が聞くかつ

!!」

一方的に殴られる僕は、そう言い返すだけで精一杯。手を出そうにも父さんのほうが強かった。

「バカ息子がっ、ちったあ親の言う事を聞けっつてんだ!」

あんたに、あんたに何が

頭に血がのぼった状態だと、何を口に出すか分かったものじゃない。そのせいで、殴りかかった僕の口にした言葉が、父さんの逆鱗に触れてしまったことにも気付かない。

その後の様子はとてもじゃないが見るに堪えない。父さんが僕を殴り続ける様を、玄関から母さんたちが静かに見つめ　母さんに傷の手当てを受ける僕は、痛みを我慢しながら静かに床を見つめていた。

「あんたたちのせいで絆創膏が足りないっいたらありやしない。いい加減自分のことばかり考えるのはやめな」

母さんの言葉はほとんど耳に残らなかった。ポーっとし続けるうちに、傷の痛みは些細な事でしかなかった。

深夜、僕はたまらず家を抜け出した。

ポケットにしまった財布とケータイ以外に、持ち物は特にない。行くあてもないままに走り続け、しまいには雨に打たれる始末……情けないったらない。

辿りついたのはバス停、屋根があって助かったと雨をしのぐ。弱い雨は次第に本降りに。空から降る雫はどこか、僕を責めているようにも思えた。

冷たい雨はやむことを知らず、むしろ勢いを増しているようだった。そこら中に生えている草木からしてみれば、天からの恵みなんだろうが……僕にとってそれは、何かの罰だと感じた。

「ちっ、こっちの都合はお構いなかよ……もう少し考えてくれたっつていいだろうが……そりゃ、僕だって父さんと喧嘩続きなんて…

…」

ポツリと愚痴が零れる。いつから僕は、父さんとこんな関係になつてしまつたんだろう……。

本当は、こんなことしたくない……っ。願いは届かず、父さんと笑つて食事をする、そんな些細なことさえ叶わない日々が続いていた。でも、それが当たり前前の生活になつた僕は、父さんとどう接していいのかすらわからなくなつてしまつた。話しかけてくても、何を言えばいいのか……。

そう感じているのは、父さんも同じだつたはずだ。毎日仕事に明けくれて、僕にかまつている暇などない。小さい時の記憶にあるのは、父さんの影だけ。たまに暇が出来ても、普段からの疲れで昼間っからやけ酒をしたり、パチンコ屋に行つたりと、正直ひどい親だと思つたことしか。

父さんが怖い、それが小さい頃のたつた一つだけある印象だつた。仕事をしている時の真剣な様子　眉間によつたしわ、日にじりじりと照らされる中、汗水流して一言も喋らずに作業をする姿に、今でこそ何かを覚えたりもするが、当時の自分にあの表情は、恐ろしかった。

そんなことばかり思つて父さんを見るせいで、自然と近寄りがたくなる。そうして避けるから、父さんと言葉を交わすこともなかった。

思い返してみると、父さんとまともに話したことなどなかった。僕の方から逃げていたせいもあるが、父さんもあまり干渉しようとしてこなかった。2人して避けて、いや、逃げてきたせいで、僕たちの間にある接点はなくなつていった。気づけば、残つたのは親子であることだけ。それ以上でも、それ以下でもない。

いつも遠くで、お互いの背中を見つめるしかない二人。それが、本当に、当たり前前になつていたせいで、今まで疑問の欠片も感じていなかった。そういうものだと思つて身体に染みついてしまつた。客観的に見てもつと仲良くすれば、と思つても、いざ自分の立場に当てはめてみたらこのままでも特に支障はないし……と、結局僕は逃げてしまふ。

素直に自分の気持ちを言い表せないわけでもない。僕も父さんも一応言いたいことははっきり言う性格の持ち主だ。それがどうしてお互いのことになるかというと口が重くなるのか、分からない。それが分かれば苦勞はしてないんだけどね。

「……分かつているのに分からないってのは、面倒なもんだな」

主観的に見た時、僕は自分を肯定したくなる。でも、実際のところどちらも肯定できないのは分かっている。第三者から見たら、僕も父さんも自分の意見ばかり押し付けているように見えるんだろう。お互いに相手の考えを理解しきれない。そのせいでいらぬ誤解は生まれる、衝突が多くなる。嫌な悪循環だな、ずっと理解できないまま続けるのかこの無限ループを……

何かハツとした気がする。思わず立ち上がってしまったが、今ので何か掴みかけた。落ち着いて客観的に見たら、僕も父さんも自分の意見を押し付けている。それはお互いの考えをよく知らないからでも元々の原因は

いつもいつも父さんを悪者扱いしていた、だけど、本当にそうだとは言いい切れない。確証のないままに、自分だけを肯定してしまっていた。父さんは……父さん、は……僕は父さんの何を分かつて、こんなことを言えるんだろう。

自分の都合ばかり考えていたわけじゃない、相手の都合だつて考えるようにしていた。でも、その相手の都合が分からない。父さんがどんな思いで、僕に後を継がせたいのかも、僕に対する気持ちも、何もかも、分からないままここにいる。

「そうか……っ。そうだったのか……だとしたら、親の心子知らず、子の心親知らずっていうか……僕も、父さんも……バカだなあ……」

雨が次第に激しくなる。バス停の屋根に叩きつけられる音、揺らされる葉っぱ、道路に広がった水たまり。辺りを照らし出す頼りない街灯の明かりだけが、ぼんやりと足元に注いでいた。

すぐ近くにあった自販機でホットコーヒーを買う。身体が少し冷

えてきた。上に春用のコートは羽織っているが、雨の冷気が思ったより冷たい。コーヒードで暖が取れるわけもないが、気休めにはなる。携帯を見て、12時近くになるうとしてしていると分かった。そろそろ帰ろうかとも思ったが……傘もないのにこの雨の中を帰ったら、間違いない風邪をひく。それに、このままじゃまた先延ばしにしてしまう……今まで逃げてきたのに、今日はその気になれない。

「何してんだらうな……僕は」

目頭を押さえる。どうしてだろう、今すごく泣きたい気分の方がいる。小さい時から、父さんともっと話していたら、もっともつと父さんと関わりうとしていたら、今は変わっていたのかもしれない。もし、僕が父さんの事を怖いと思わなかったら、もし、僕が父さんを好きでいられたら、今、こうして喧嘩をしても、父さんが傘を持ってきてくれたのかもしれない。

『本当はお父さんの事好きなんですよ？』

そんな声が聞こえた気がした。幼い日の自分によく似た声が、そつと語りかけるように。

けど認められないものがあつた。仮にそれが本心だとしても、結局のところどう接すればいいのかなんてわからない。今まで通りであれば、いずれ親子の絆はなかったことになってしまうことぐらい、分かっている。それを防ぎたいとも思う。だが、分かっている、思っている、そうであるとしても、僕にはどうすることも……

『そう決め付けることに意味があるの？』

さつきよりも少し大きくなった声、小学生の頃か……次ははつきりと聞こえた。

ふと自分の隣に目を向ける。そこには、ふくれっ面した男の子が一人、俯いて地面を見つめるその目は少し潤んでいた。本当に、喧嘩したすぐ後みたい……でも、時折前を向いて誰も来ていないことに悲しい顔をする。本当は来てほしいと思っっているのに、意地を張っているのか。そして、堪えきれずに涙が一筋流れた時、傘を持ったあの人が見えて、その涙を手で拭ってくれる。

「……そんなこと、あるわけないよな」

我ながら非現実的すぎた。あの父さんがそんな父親らしいことをしてくれるわけない。僕だって息子らしいことを何一つしていないんだから……

『じゃあ、何かすればいいじゃん』

今度は中学生の僕か、簡単に言ってくれる。お前に何が分かるっていうのさ……思いだけなら確かに容易かもしれない。でも、今までの18年間をどうにかできるとは思えない。それも、ただの思いだけで、勝手な希望だけで何かが変わるわけがない……

また　すぐ横に、部活帰りの恰好をした僕がいた。大会で遠征に行っていたのか、過ぎ去ったバスから降りた僕は、土砂降りの中を駆けて、屋根の下に入った。スポーツタオルで水滴を拭きながら、突然の雨を怨めしそうに眺める。

「……ほら、どうせ誰も来ないって……諦めて雨に濡れて帰れよ。」

早く、帰ってくれ……！　どんだん自分が惨めになるじゃないか……！　お前には迎えに来て、僕には迎えに来ないって言うのかよ……！　僕とお前の何が違うっていうんだ……！　見た目も中身も、全部同じはずだろ……！　大きな差はないはずなのに、どうして、お前は　　っ。

そう語りかけた先の“僕”は　　鏡に映したようにそっくりな僕は呟いた、

『変わるうとした分だけの違いだよ、僕は』

そう言って、誰かの差し出した傘の中に入って、そいつは消えていった。

「　　！　　！」

……寝て、いたのか。視界がぼやけて……頭が痛い、どこかポットとした感じもする。完全に風邪をひいた。苦い、泥の味がする。舌を動かさうものなら、ざらざらした触感が伝わってくる。呼吸が落ち着かない、辛い、寒い

「　　！　　！」

誰か、呼んでいる……？ 懐かしい、いや、初めてだ……あの怒鳴り声を、こんなに心地よく聞くことがあるなんて……

目を開けた先で僕の名前を呼ぶその人に、ゆっくりと、手を伸ばした。

「 父さん……」

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

私としては満足せざるをえないのかな、と言った微妙な具合ですが、一人でも楽しんでくれた方がいらしたら嬉しいです。

また投稿するかもしれないので、その時もまた生温かい目をお願いします。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162t/>

雨宿り

2011年5月30日12時10分発行